



## この人を見よ

イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて出て来られた。ピラトは、「見よ、この男だ」と言った。」

(ヨハネによる福音書 19章 5節)

紀元 26 年から 36 年にかけてユダヤを治めたのがローマ帝国の総督であったピラトです。当時、ユダヤの国はローマ帝国の中にあって、大幅な自治が認められていました。しかしユダヤに出来ないことがありました。死刑の執行です。そこでユダヤの人たちはイエス様をピラトのもとに連れてきました。ピラトが死刑執行の命令を下すことを狙っていたのです。

ピラトという人は、権力闘争を勝ち抜いてきたなかなかのやり手で、また相当あくどい人物だったようです。しかしイエス様をすぐに死刑にしようとはしませんでした。それどころか何とかしてイエス様を助け出そうとしたのです。

祭司長、律法学者をはじめとするユダヤの人たちがイエス様を引っ立てて来た理由はひとことで言えばねたまでした。「イエスは自分を神の子、救い主だと言っている、こんなのは嘘だ、神様を冒瀆することだ」ということです。しかしユダヤの人たちは死刑執行が出来ませんし、また、そんな理由でピラトに死刑を認めてもらうことも出来ません。異教徒のピラトにとって、イエス様が神様を冒瀆しているかどうかなんて、どうでも良いことだったのです。

そこで人々は、「イエスは自分を王だと言っている」と言い変えました。皇帝に対する謀反の罪で死刑に出来ると踏んだわけですね。ただ、ピラトはそんなすりかえには騙されません。ピラトはイエス様が謀反を起こしたとも十字架にかけなければならないほど危険な人間とも思わなかったのです。

当時、総督は、祭りの度ごとに民衆の希望する囚人を一人釈放するという慣わしがあり、ピラトはこれを利用してイエス様を助けようとしていました。でもユダヤの人たちは納得しま

2020年4月発行  
せん。そこでイエス様を鞭で打たせましたが、それでも駄目でした。

すると、ローマの兵隊たちがイエス様をなぶりものにするということが起こりました。イエス様の頭にトゲがついている茨の冠をかぶせ、王様が着るのによく似た紫の服をまわせた上で、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、びんたしたのです。ピラトは体じゅう血だらけになっているイエス様を人々の前に連れ出して言いました、「見よ、この男だ」。これは、イエス様こそあなたがたの王様だ、この人を信じなさい、ということではありません。「見なさい。茨の冠をのせられ、紫の服を着せられて、体じゅう傷だらけのこんなかわいそうな男が謀反を起こしたと。そんなことがあるはずはない。死刑にすることはない」ということだったのです。しかし、ピラトの声はイエス様を十字架につけろという声に打ち消されてしまいました。ピラトはついに、「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王を自称する者は皆、皇帝に背いています。」という声に屈して、イエス様の十字架刑を承認してしまうのです。

私はこの2月、ポーランドのアウシュビッツを訪問しました。ユダヤ人 100 万人が殺されたところで、そこにこういう証言が残されています。…少年を含む罪のない3人の人が殺された時、声が上がりました、「神様はどこだ、どこにおられるのか」。その時、ある人が答えました、「どこだって、ここにおられる。ここに、この絞首台に、吊るされておられる。」

この悲惨な出来事が大きなヒントを提供しています。神様が人間によって殺されたのです。全能の神がイエス様となってこの世界に現れました。しかしその力を用いることなく、罪人（つみびと）として、十字架につけられて死ぬという、常識では考えられないことが起こりました。しかしだからこそ、イエス様は救い主であり、世界の王であるのです。ピラトが自分ではよくわからないまま指し示したイエス様に私たちの人生がかかっています。

(2020年4月5日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊